

## 共に生きる夫婦

### 【聖書】創世記2章18～25節

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。

主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「ついに、これこそわたしの骨の骨 わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。

### 【序】天地創造の素朴な文書

創世記第1章に用いられている天地創造の記述は、**紀元前6世紀**のバビロン捕囚時代に記された文書です。そこでは、神が、万物を創造された最後に、それを管理する役割を担う者として、人間の男と女をご自分にかたどって創造し、「産めよ、増えよ、地に満ちて 地を従わせよ」と祝福されたと述べられていました。しかし2章4節からは、その天地創造文書よりも3世紀も前の**紀元前9世紀**に書かれた**素朴な記述の創造物語**が、用いられています。山下先生が先週、その文書の第一回目を説教されました。第二回目の今日は、男と女の創造から、**共に生きる夫婦の絆**について学ぶことにいたします。

### 【1】彼に合う助ける者とは

主なる神は、先ず土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に**命の息**を吹き入れて、生きる者とし、エデンの園に住まわせ、耕し守らせました。そして「人が独りでいるのは良くない。彼に**合う助ける者を造ろう**」とおっしゃって、家畜や鳥や獣を、アダムと同じくアダマ（土）で形づくりました。アダムはその生き物に、それぞれ**名前**を付けて呼びかけ、会話を交わそうとしましたが、**人格的な交わり**を結ぶに至りませんでした。

そこで神は、アダムを深く眠らせ、彼の**あばら骨の一部**を抜き取って**女**を造り上げ、彼の所に連れて来ました。アダムは喜びの声を上げました。「ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これをこそ、**女（イシャー）**と呼ぼう。まさに、**男（イシュ）**から取られたものだから」。骨と肉、即ち**骨肉**とは家族・身内の者を指す言葉です。こうして男は**身も心も一つ**になって**共に生きていく相手（女）**を与えられたのでした。

しかしこの記述には、昔から**批判**が向けられてきました。神は**先ず男**を造り、その**助手**として**女**を造られた。しかも男の体の一部で女を造られた。女は男より**一段低い者**、**男に従属する者**・**男より**

劣った者なのか等々。皆さんはこの記事をどうお読みになりますか。

確かに新約聖書のコリント教会への手紙の中で、使徒パウロは「女の頭(かしら)は男」とか「女が男から出て来た」「女は男のために造られた」(第一、11章)と語っています。しかしそれは、コリント教会の中の特殊な状況からなされた忠告であって、創世記のこの記述は、男女の優劣や秩序の根拠となるようなものではないと思います。

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」の「彼に合う助ける者」は、口語訳・新改訳では「ふさわしい助け手」と訳されています。この「ふさわしい」は「向かい合って対応する」という意味です。また「助ける者」「助け手」と訳したヘブル語の「エーゼル」は、「助け主である神」を指す場合が多いのです。代表的な例は詩編 121 編でしょう。「わたしは山に向かって目を上げる。わが助けはどこから来るのか。わが助けは天地を造られた主から来る」。

ですから男(イーシュ)と向かい合って共に生き、彼を支え、守り、神の助けをもたらしてくれる骨肉としてのイーシャー(女)であって、男に従属する助手という者ではありません。アダムは、身も心も一つになって共に生きていく相手(女)を与えられたのでした。では神によって出会うことが出来た男と女は、それからどのように生きていくべきだったのでしょうか。

## [2] 家庭の崩壊

ここで旧約聖書の中で最もよい組み合わせと言われたイサクとリベカ夫婦について、見て参りましょう。イサクはアブラハムが100才、サラが90才の時にやっと与えられた秘蔵息子でした。ですからイサクが成人すると、アブラハムは一番信頼する年老いた僕を自分の出身地に送り、同族の中から、イサクにふさわしい嫁を探してくるように頼みました。

老僕が一生懸命に祈って探し当てた娘がリベカです。豊かな家の美しい娘でした。気立てが優しくて、良く気がついて身惜しみしない働き者、しかも決断と実行の人でもありました。まさに三国一の花嫁でした。一方イサクは、荒れ野に良い井戸を掘り当てる名人でした。井戸を掘るには根気がいります。彼はねばり強い人だったようです。しかもせっかく良い井戸を掘り当てても、此処は俺の縄張りだと難ぐせをつけられると、貴重な井戸を幾つもゆずっています。争いを好まない温和な人柄でもあったようです。

このように家柄といい、人柄といい申し分のない二人の結婚でしたから、さぞかし三国一の幸福な家庭が出来たはずなのに、現実には全く異なる結末になってしまったのです。イサクとリベカ夫婦が、双子として生れ育った二人の息子のどちらに、家督を継がせるかで考えを異にし、結局家族4人がバラバラになってしまったのです。

家庭が崩れるという事態は、或る日突然に起こるものではありません。白蟻に喰われるように、大事な土台や柱が内側から長い時間かけて、少しずつ蝕まれていき、その上で何か事が起こった時に、崩れてしまうのです。ですから私たちはイサクとリベカ夫婦の悲劇を良く学んで、自分たちの教訓にしなければなりません。

### [3] 心が一番求めていること

イサクは40才で結婚し、60才の時に待望の子、しかも元気な双子の息子を与えられました。数字をそのまま事実として受けとれば、20年間待ち続けたこととなります。男中心で家系を大事にするユダヤ人社会では、かつての日本もそうであったように、妻が跡取り息子を産めなければ、他に妻を得て子どもを生ませることが当然と考えられていました。ところがイサクはリベカ以外の妻によって子を得ようとはしませんでした。

聖書はこう記しています。「イサクは妻に子供ができなかったので、妻のために主に祈った」(創世記25:21)。妻のために主に祈った——何という素晴らしい言葉でしょうか。祈りがかなえられるのに相当長い期間かかりましたが、イサクはくじけることなく祈り続けたのです。彼がリベカをどれほど愛していたか、トラブルのない平和な家庭を築こうと願っていたかが伝わって来ます。

一方のリベカも神に祈る信仰の人でした。おなかがひどく痛んで無事に出産できないのではないかと不安になった時、すぐさま礼拝所へ出かけて行って祈っています。このように祈る夫婦でありながら、どうして二人の家庭が崩れてしまったのか。それは二人が一緒に祈り合っていなかったからだと思います。それぞれが祈ったにもかかわらず、「一緒に祈り合った」という言葉が聖書に見当たらないのです。

もう一つ見逃せない原因があります。それは「イサクはエサウを愛した。しかしリベカはヤコブを愛した」(25章28節)という言葉です。巧みな狩人でたくましく野山を駆けめぐる兄のエサウは、いかにも父親好みの息子でした。一方弟のヤコブは、穏やかで家事の手伝いをよくします。いかにも母親好みです。夫婦が二人の息子をそれぞれ偏って愛したのでした。

こうして家督をどちらに継がせるかという時になって、リベカは目の見えなくなったイサクをだまして、ヤコブをエサウだと思い込ませて、祝福の祈りをさせてしまいました。20年もの間他に妻をつくらず、祈り続けたほど仲の良かった夫婦が、子供に家督を継がせるという子育ての完成点で、妻が夫をだましてしまうという夫婦に成り果てていたのです。

どうして二人はこの重大な食い違いを、話しあって解決しておかなかったのか。祈り合うことをしなかった夫婦は、一緒に話し合うこともしなくなっていたのでした。夫婦が互いに心を通わせることを大切にしていなかったのです。

癌で命の日々が限られたことを知らされた人たちが一番望むことは、親しい家族や友人と出来るだけ時間を過したい、そして心おきなく話し合いたいということだそうです。真実の会話こそ、人間の心が一番望んでいることなのです。若い二人が人生のいろいろな問題を乗り越えながら、老年を迎えます。その時に夫婦がどれだけ心を合わせて、納得のいく人生の幕引きを一緒に出来るか——そこに結婚生活の一番の幸福があると私は思っています。

### [3]会話を大切にしなくなった原因

イサクとリベカは、どうして**会話の貧弱な夫婦**になってしまったのでしょうか。族長のイサクは、一族を率いる者は**たくましい男**でなければならないという**信念**を持っていたと思います。また**長男が家督を相続する**という**社会通念**をそのまま受け入れていたことでしょう。そのような信念とか社会通念に従って、**何の疑問も持たずに**子供を育てていくと、人に相談したり、助言を求めたりしなくなります。夫婦の会話も乏しくなっていきます。

なぜリベカは、目が見えなくなった夫をだましたのか。理由がありました。彼女は双子が**おなかの中で押し合って苦しんだ時**、礼拝所へ行って祈りました。そして「**兄が弟に仕えるようになる**」という不思議な**神の言葉**を聞き取りました。ですから彼女は夫のイサクに、神の御心通り弟のヤコブに手をおいて、家督相続の祈りをさせようとしたのでした。

しかし神の御心ならば、夫をだましてもよいのでしょうか。神の御心に反すると思われることを夫がしようとしたのなら、なおさら夫とよく話し合うべきでした。そして**夫婦一緒に**神の御心をたずねて祈るべきでした。

もう一度言います。自分の好き嫌いの**感情**とか、**信念**とか、**社会通念**等に従って、**疑問を抱かずに**自分の生活を送っていくと、人に相談したり、助言を求めることがなくなっていきます。夫婦の**会話すら乏しくなっていきます**。このことを、イサクとリベカ夫婦が教えてくれています。

スイスの精神科医**トゥルニエ博士**の奥さんは、心臓発作で死んでいく時に、夫の手をとり「私たちは**幸せ、本当に幸せ、どうも有難う**」と言って亡くなったそうですが、この夫婦の**前半**は惨めなものでした。「**貴方は私の先生・牧師・医者。でも私の夫ではない**」と奥さんから手厳しく非難される夫だったそうです。それが次第に会話の豊かな夫婦に変わっていきました。それでも夫婦喧嘩はしたそうです。奥さんを殴ったことさえありました。

「全くいさかいがなかったと言うなら、それは嘘をついているか、どちらか一方が全く潰されているかであろう。」「大切なのは、争いがないことではなくて、争いをどう**始末**するかにあるのではないか」とトゥルニエは述べています。

結婚式で必ず読まれる聖書の言葉は、「**こういふわけで、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる**」(創世記2:24)です。ここに使われている動詞「**離れる**」「**結ばれる**」「**一体となる**」は三つとも**未来形**です。日本語訳ではそれがはっきり出ていなくて残念ですが、英語訳では**shall, will** がきちんと使われています。

「**父母を離れる**」とは**親離れ、子離れ**することです。夫と妻のどちらの側も、親離れ・子離れしないと二人は夫婦として深く結ばれて一体となることは出来ません。「**結ばれる**」とは**人格的結合**です。お互いに相手の語ることに耳を傾け、心をこめて聴くことによって次第に深められていきます。

夫婦の一体性は、結婚式を挙げた、自分たちの住居をもった、一緒に旅行をする、子供を生み育てているということで、自動的に手に入るものではありません。時間をかけて言葉を交わし、聴き合い、一緒に考えて行動することにより、次第に実現されていくのです。

### [結] 神の結び合わせを信じて

「こういうわけで、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」の「こういうわけで」とは、神が二人を骨と肉を共有する者として創造し、互いに助け合う者として引き合わせてくださったからという意味です。そこには神の意志が働いているという信仰があります。神が結び合わせて下さったのですから、生まれも育ちも考えもどんなに違っていても、二人は必ず一体になっていけるといふ信仰があります。

神を信じる者には、絶望はありません。たとえ今は豊かな会話に欠ける夫婦であっても、神は必ず変えてくださいます。人生の終わりに、「私たちは幸せ、本当に幸せ。どうもありがとう」と言える者にしてくださいます。神の導きを信じて、一体となっていく結婚生活を、送っていく者になりましょう。

お祈りします。

天地万物の創造主である神さま、今日もあなたの御言葉を聞くことが出来て、感謝します。私たちは、自分の思いで行動しがちです。でも私たちの思いを超えて、あなたのご計画、またご配慮、愛の導きがあることを信じる信仰を、しっかり持たせてください。そして夫婦一緒に祈りを合わせ、あなたの御心を一つ一つ聞きながら歩む者にしてください。夫婦ばかりでなく、色々な人との交わりに於いても、祈りを合わせる絆を持つことが出来ますようお導き下さい。世界に平和をお与えください。命を尊び、愛し合い、共に生きる者にして下さい。このお祈りを主イエス・キリストによって、おささげします。アーメン